

『源氏物語』における

「冷やかなり」「肌寒し」「寒し」「寒げなり」「ひびく

—恋愛の交錯—

相原 咲清香

はじめに

『源氏物語』における寒暖の感覚は、これまでほとんど論じられて来なかったのだが、実のところ、登場人物の心情ならびに物語展開と密接に関わっている事情については、すでに言及した¹⁾。今回は「冷やかなり」「肌寒し」「寒し」「寒げなり」を取り上げ、これらの語の働きを具体的に分析しながらストーリーとの関係について、詳しく検討していきたい。なお、引用は日本古典文学全集『源氏物語』一〜六(小学館)により、巻数とページ数を付記した。傍線はすべて筆者による。

一 「冷やかなり」とならぬ恋

「冷やかなり」は、全体で一四例(正篇八例、宇治十帖六例)ある。

源氏に関してはつぎのような例があげられる。

空のうち曇りて、風冷やかなるに、いといたくながめたまひて

(夕顔・二二二六二)

君は心地もいとなやましきに、雨すこしうちそそぎ、山風ひや

やかに吹きたるに

(若紫・二二二八九)

風いと冷やかに吹きて、松虫の鳴きからしたる声も、をり知り

顔なるを、さして思ふことなきだに、聞き過ぐしがたげなるに、

ましてわりなき御心まどひどもに、なかなかこともゆかぬにや。

(賢木・二二一八〜二二二)

夕顔巻は夕顔の死後、源氏が追慕している場面、若紫巻は源氏が藤壺を想っている場面、賢木巻は源氏と六条御息所がお互いに想い合っている場面で、それぞれ、「冷やか」な風が吹いている。

夕霧については、野分巻に、花散里を見舞いに訪れる道中、「横さま雨いと冷やかに吹き入る」(三二二六二)とあり、この時、夕霧には、前日垣間見た紫上のことばかり思い浮かんでくるのであった。若菜下巻にも、紫上を思慕する夕霧の心中に触れた直後に「夜更けゆくけはひ冷やかなり」(四一一八六)と語られている。

女性でただ一人、「冷やかなり」を感じたのは紫上であった。「風うち吹きたる夜のけはひ冷やかにて、ふとも寝入られたまはぬを」

(四一六二)は、女三宮降嫁の際、一人寝の紫上の様子を描いた場面である。源氏を思つて眠れないつらさを一人で抱え込まざるを得なかった。折しも風が吹いて、夜が更けていく、その冷やかさ。

このように、相手を想つて焦がれる気持ち、切ない気持ちを抱きながら、離ればなれであることを余儀なくされる、という状況において「冷やかな風が吹く。『源氏物語』正篇においては、男女の恋愛にまつわる場面で、「冷やか」な風が吹くのである。源氏に「冷やか」に感じられるのは主に風であるのに対して、紫上には「風うち吹きたる夜のけはひ」、夕霧には「横さま雨」「夜更けゆくけはひ」であり、微妙な違いが見られる。

源氏は冷やかな風が吹いた後、満たされぬ想いの代償を求め、様々な恋愛を重ねることになる。例えば、夕顔の後に末摘花を求め、藤壺の後に若紫を求め、といった具合である。源氏の場合「涼し」も「冷やかなり」も、相手を変えて繰り返されている。ところが紫上の方は、女三宮降嫁の際「冷やか」な夜を過ごしても、源氏以外の人を代償に求める事は許されない。その結果、望んだのは出家であった。正式な出家は源氏が許可しなかったが、五戒を受け仏事に従事することで、紫上はようやく「涼し」の境地に生きられるようになる。源氏が密通事件を経験した後も、涼しくなると、出家した女三宮に未練を訴えるのは明らかに違う。ここで、愛に絶望した紫上と、執着する源氏の対照性が浮上してくるのである。

二 宇治十帖の「冷やかなり」

まず、薫が八宮の留守中、宇治を訪れる場面を見てみよう。

いと荒ましき風の競ひに、ほろほろと落ち乱るる木の葉の露の

散りかかるもいと冷やかに、人やりならずいたく濡れたまひぬ。
《中略》そこはかとなき水の流れどもを踏みしだく駒の足音も、
なほ、忍びてと用意したまへるに、隠れなき御匂ひぞ、風に従
ひて、主知らぬ香とおどろく寝覚めの家々ありける。《中略》
しばし聞かまほしきに、忍びたまへど、御けはひしるく聞きつ
けて、宿直人めく男なまかたくなしき出で来たり。

（橋姫・五十一―二八―二九）

訪問に際して、薫は、極力目立たぬように気を配っている。音を立てないという薫の配慮は、八宮邸に近づいた頃、効をなす。姫君達の弾く琴の音が聴こえて来、以前から聴く機会をうかがっていた薫は、興味を持って耳を澄ませる。この立ち聴きは「宿直人めく男」がやって来て中断される。この男は傍線部ウ「御けはひしるく聞きつけ」たとあるが、それは、傍線部イに示された「隠れなき御匂ひ」が、ここにも立ちこめたためであろうことが予想される。

ところで、道中、薫は濡れてしまう。「人やりならず」とあり、自ら選んだ道行きであることが強調されている。「冷やか」に濡れてもお忍びの宇治訪問に「心細くをかし」（二二）という感を抱いている薫のわくわくした気持ちは、先ほど述べた琴を聴く場面から、垣間見へとつながっていく。垣間見の場面は、後述するように「寒し」という語を含み、薫の大君達への援助のきつかけとなっている。正篇の「涼し」に導かれた場面で源氏が女性に興味を持ったように、薫は風に吹き付けられた「冷やか」な露を受けながら宇治へと向かい、大

君に恋愛感情を抱くようになるのである。

薫の宇治行きに見られる「冷やかなり」は、もう一例ある。

都にはまだ入りたたぬ秋のけしきを、音羽の山近く、風の音も
いと冷やかに、榎の山辺もわづかに色づきて

(橋姫・五一―七〇)

先の場面は晩秋だったが、ここは、まだ秋に入ったばかりである。ここでは聴覚に訴えているはずの「風の音」が「いと冷やか」と形容されている。この訪問時、八宮は自らの死を予感して、薫に姫君達の後見を頼み、ほどなくして亡くなる。

その後、匂宮と中君の結婚を望む薫が、姫君達のことを話している場面で、霧が立ちこめて「空のけはひ冷やか」(総角・五一―三五〇)な、都にいながら宇治を思わせる風景に、匂宮はすっかりその気になり、薫をせつづくのであった。

匂宮はやがて中君と契る。

黄昏時のいみじく心細げなるに、雨冷やかにうちこそきて、秋
はつるけしきのすごきに、うちしめり濡れたまへる匂ひどもは、
世のものに似ず艶にて

(総角・五一―二七六)

匂宮が中君のことを考えて落ち着かずいたところへ薫がやって来た。一緒に宇治へ向かう車の中で、匂宮は薫に苦しい胸の内をあかす。「冷やか」に降り注ぐ雨に二人は濡れる。二人の匂いがたちこめるが、一人の訪問時に吹いていた風がここでは吹いていない。

次に挙げるのは東屋巻、薫が隠れ家に浮舟を訪ねる場面である。

雨うちこそそくに、風はいと冷やかに吹き入りて、言ひ知らずかをり来れば

(東屋・六一―八三)

浮舟側にとつて、薫の来訪は思いがけないことであつた。大君を訪ねていた頃と同じく、香を吹き送る風が「冷やか」に吹いている。

薫はこのあと歌を詠んで袖の雨を払う。薫の香は「追風」に運ばれ、「いとかたはなるまで東国の里人も驚きぬべし」(八四)とある。薫は南の廂に案内されたが、そこから内へ入つてしまい、浮舟に恋心を打ち明けた。

同じく浮舟に興味を持った匂宮は声と香を真似、薫を装つて忍び込む。翌日も浮舟と過ごした匂宮が、都へ戻る朝の別れの場面に「冷やかなり」が見られる。

風の音もいと荒ましく霜深き曉に、おのがきぬぎぬも冷やかに
なりたる心地して

(浮舟・六一―二八)

離れ難い気持ちを抱きつつも、周りにせかさされ、何が何やらわからぬままに匂宮は出立した。風の音が荒々しく、霜が降りている明け方に、二人とも涙にくれて袖を濡らし、めいめいの着物が「冷やか」に感じられるのである。別れのつらさが描かれ、六条御息所と源氏の最後の逢瀬の場面を想起させられる。

このように、宇治十帖では、薫が大君に関心を持つに至る場面の冒頭に見られた「冷やかなり」は、宇治訪問の度に繰り返されている。薫の大君への懸想とともに、匂宮の中君への想いも加わっている。また、浮舟との場合も、薫が初めて浮舟に語りかける訪問場面

で「冷やかなり」が見られる。これら「冷やかなり」の働きは、正篇の「涼し」のそれに相当する。薫一人の来訪の場合、「冷やか」な風が吹いており、匂宮と一緒の時は風は吹いていない。これは、薫の特徴とされる体臭が「隠れなき香」となって人々に薫の訪問を知らせる役目をするのと呼応している。

なお、最後にあげた匂宮と浮舟の別れの朝に見られる「冷やかなり」は、正篇の「冷やかなり」が意味するところに近い。また、結局、薫は大君と結ばれず、浮舟も、匂宮に心惹かれて揺れ、薫とはすれ違っている。場面状況は正篇の「涼し」に相当するが、内実は正篇における「冷やかなり」の意味をも包含しているといえよう。つまり、宇治十帖における「冷やかなり」は、正篇の「涼し」「冷やかなり」をあわせもっている点で、留意すべきであると考えられるのである。

三 正篇における「寒し」「寒げなり」

——末摘花のイメージ——

作品中に「寒し」は七例（正篇六例、宇治十帖一例）、「寒げなり」は九例（正篇四例、宇治十帖五例）見られる。そのうち「寒し」五例、「寒げなり」三例が末摘花と関連している。

まず、末摘花巻以外の二例をあげる。夕顔巻では、源氏が夕顔方に泊まった明け方、耳に入ってきた隣の家に住む貧しい男達の会話の中に「あはれ、いと寒しや」（二二二九）とある。朝顔巻では、故式部卿宮邸に向かった源氏が、人が多くいる正門を避けて、西門へ

回ったところ、「寒げなるけはひ」（二二四七）の門番が出てきた。

どちらの例も貧しく、みすばらしい者の様子であり、それに対する感想として「あはれ」が繰り返されている。「寒し」「寒げなり」は、寒さを回避することができないほどの貧しさを象徴しているのである。貧しいという点では末摘花とて例外ではない。末摘花巻で、こつ

そり普段の様子をうかがおうと覗いた源氏の目に飛び込んできたのは、女房達の貧しそうな有様であった。「いと寒げなる女ばら」（末摘花・一―三六三）の白い着物も煤けている。「あはれ、さも寒き年かな」（三六四）と泣く者もいる。風流なさまを期待していた源氏は、実に気の毒な、落ちぶれた者の生活を見てしまった。この夜、源氏は望み通り末摘花との逢瀬を遂げ、翌朝、雪の光の中で彼女の容姿を目にし、肝を潰すことになる。着ている物も「古代のゆゑつきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには、似げなうおどろおどろしき」（三六七）であったが、源氏は「げにこの皮なうて、はた寒からましと見ゆる御顔さまなるを、心苦しと見たまふ」（三六七）と、寒さのため毛皮を着ずにいられないであろう末摘花の生活を思いやってもいる。

邸をあとにする際、到着時には暗くてよく見えなかった、車を寄せた門の老朽化が語られる。ここで、あたりの荒れた様子に、「松の雪のみあたたかけに降りつめる」（三三八）と、「源氏物語」に一例のみある「あたたかけなり」が、本来冷たいはずの雪を形容するものとして逆接的な形で用いられている。そして「衣は雪にあひて煤

けまどひ、寒しと思へる気色ふか」(三六九)い女を目にすしたすぐ

後に、源氏が「鼻の色に出でて、いと寒しと見えつる御面影、ふと思ひ出でられて、ほほ笑まれたまふ」(三七〇)など、「寒し」「寒げなり」は、末摘花邸における場面に繰り返されているのである。これらの描写は、すべて源氏の目を通してものとなっている。末摘花の容貌に失望しながらも、自分以外の人が世話をするとはとても思えず、見捨てることはできなかった。困窮の様子を直接目にしたからこそ、源氏は救いの手をさしのべずにはいられない。末摘花巻に描かれている「寒し」「寒げなり」は、結果として源氏と末摘花との縁を深くするものとなっている。末摘花巻には、「寒き霜朝に、搔練このめるはなの色あひや見えつらむ」(三七五)という、末摘花を源氏に紹介した命婦の言葉があり、ここでは末摘花の「鼻」が笑いものになっている。

出逢いの場面のみならず、その後も「寒し」「寒げなり」は末摘花についてまわる。

光もなく黒き搔練の、さみさるしく張りたる一襲、さる織物の袷を着たまへる、いと寒げに心苦し。《中略》御鼻の色ばかり、霞にも紛るまじく華やかなるに、御心にもあらずうち喚かれたまひて、ことさらに御几帳ひきつくるひ隔てたまふ。《中略》御声などいいと寒げに、うちわななきつつ語らひきこえたまふ。

《中略》「醒醐の阿闍梨の君の御あつかひしはべりとて、衣どももえ縫いはべらでなむ。裘をさへとられにし後寒くはへる」

と聞こえたまふは、いと鼻赤き御兄なりけり。

(初音・三一―四七―四八)

傍線部ア・ウの二箇所「寒げ」とあり、実際、末摘花自身が、兄に「裘を渡してしまつて以降「寒く」過ごしている(傍線部エ)と語っている。源氏は「あはれに、我だにこそは」(二四八)との思いを新たにし着物を提供することになる。この場面で強調されているのは、末摘花を哀れむ源氏であるとともに、相変わらず滑稽な彼女の身なりと、トレードマークの赤い鼻である。寒さをこらえて裘を譲つた彼女の兄の鼻までもが引き合いに出されている。

末摘花の場合には、貧しさに加え、着物や赤鼻を笑うという要素が付加されている。末摘花巻には、「着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも、人の御装束をこそまつ言ひためれ」(三六七)と断り書きがある。「このような「昔物語」として、たとえば、『うつほ物語』が想起されよう。『うつほ物語』における「寒し」系の語は、主に恋愛の場面において使われていることがわかる。それは、『万葉集』に代表されるような、寒いから暖めて欲しい、あるいは一人寝では寒い、といった和歌に見られ、相手が恋しいというメッセージが、象徴的に表現されているのである。『源氏物語』正篇には、このような、一般的な男女間の恋愛における「寒し」「寒げなり」はない。

ところで、『源氏物語』における「寒し」は、気象としての物理的な寒さが、貧窮を浮き彫りにする要素となっている。と同時に、初

音巻での繰り返しでより一層明確になったように、末摘花の鼻の赤さや、流行遅れの着物(毛皮)などが取り立てられ、寒さに震える設定のなか、哀れみとおかしみが巧みに織り込まれていた。「昔物語」の伝統をよく知る読者に、ディテールがパロディ化して差し出されているのである。

四 「肌寒し」について

——『うつほ物語』との比較を交えて——

「寒し」「寒げなり」が末摘花を取り巻くものとなつているとすれば、『うつほ物語』において男女の恋愛の場面で用いられている「寒し」「夜寒」「寒み」「寒さ」にあたるものは、『源氏物語』の中ではどのようになつているのであろうか。

それらは、「肌寒し」「冷やかなり」という語で表されているのである。「冷やかなり」についてはすでに述べた。わずか三例ではあるが、「肌寒し」が描かれる場面には、共通して悲嘆に暮れる人物の姿があり、その主体は桐壺帝、落葉宮、玉鬘である。

「肌寒し」は『うつほ物語』に一例のみ見られる。あて宮に求婚するため、源宰相は、長年、大事にしていた家族を捨てて、家族はショックを受け、特にかわいがられていた息子の真砂君は悲しみのあまり死んでしまう。残された妻に、他に言い寄る男が現れ、その煩わしさから、妻と娘の袖君は志賀の山に隠棲する。娘は父を、妻は夫を慕う場面に、「秋風肌寒く」(引用は、室城秀之氏『うつほ物語

全』(平7 おうふう)以下同じ。菊の宴・三四五)とあり、妻は「秋風の身に寒ければつれもなき(同)と口ずさむ。この例が端的に語るように、「肌寒し」は、『うつほ物語』に見られる「寒し」や「夜寒」などと同様、相手の肌身を恋しがっていることを表している。

源宰相の妻が、「身に寒」という「秋風」は、一方で父親を慕う袖君にも感じられるものとなつていいる。このような「肌寒」い秋風は『源氏物語』玉鬘巻にも見られた。玉鬘一行が参詣した初瀬で、まだ何の手がかりもなく、頼りない状態である時に、谷から吹き上がってくる「秋風」が「肌寒く、いっその不安をかき立てている。

「寒し」系の語に関して『源氏物語』と『うつほ物語』には、以上のような共通点がある。と同時に、これまで述べていない相違点もさらにある。桐壺巻・横笛巻の「肌寒し」は、愛する人を亡くした桐壺帝と落葉宮が感じるもので、落葉宮の場合、後には夕霧と関係が生じるが、横笛巻ではあくまでも柏木中間が主となつており、死による喪失感を伴つて、失つた相手を恋慕う際に使われている。死による永遠の別れではない『うつほ物語』に比べて、桐壺巻の「肌寒し」は、より切実な、痛々しい心情が、伝わってくる。甘美な恋愛の世界ではなく、身を切られるような悲しみの場面で「肌寒し」が響いてくるのである。喪失感の深さが相手の温もりを求める「肌寒し」に象徴されているといえるのではないだろうか。

例えば、身の上もよく知らないままの夕顔を亡くした源氏が感じるのは「冷やかなり」であつた。藤壺との逢瀬も、具体的には描かれ

ておらず、「肌寒し」の場合ほど相手と親密になつてはいない。源氏の場合、「冷やかかなり」は相手を愛えて繰り返されておき、一回きりの切なさではなかつた。そのように繰り返される悲しみとは質の違ふ、一人の人物にとつて、自分の存在をも揺るがすような重さを伴つた心情が描かれる際に「肌寒し」は用いられていると考えられる。「冷やかかなり」の場合、人肌恋しいというのではなく、心理的な、心と心の隙間、距離に苦しむ、葛藤を含んだ感情を、人物は抱えているのである。

また、『源氏物語』の「肌寒し」「冷やかかなり」は、物語の登場人物の心象として、しかも、人物を取り巻く環境と重ねられて描写されている。『うつほ物語』の場合、歌であれ会話であれ、相手に対して自分の気持ちを表現する手段として用いられているものが多いが、『源氏物語』にはそのような例はない。環境描写が人物の内面を反映し、またその心の中に入り込んでくる、いわば相互作用の効果があり、『うつほ物語』と違って他の人物にはたつきかけるのではなく、あくまで感じる人物主体の心象の中で膨らむ感覚という形で表出されていることがわかる。

五 宇治十帖における「寒し」「寒げなり」

宇治十帖の「寒げなり」「寒し」について考察する。

實子に、いと寒げに、身細く萎えはめる童一人、同じさまなる大人などゑたり。
(橋姫・五―一三二)

宿直人に持たせたまへり。いと寒げに、いららぎたる顔して持てまゐる。
(同・一四一―一四二)

宿直人が寒げにてさまよひしなどあはれに思しやりて、大きな袷破子やうのものあまたせさせたまふ。
(同・一四三)

橋姫巻の三例は、八宮家に仕える者の、寒そうな様子を薫が見て、援助するというものである。最初の例は、薫が垣間見をしている点でも未摘花巻に通じる。が、ここでは、未摘花を滑稽化して笑つたような要素はなく、あくまで薫のまじめな恋として描かれていくところに相違がある。

次に、総角巻と早蕨巻の例を挙げる。

まだ夜深きほどの雪のけはひいと寒げなるに

(総角・五―三三四)

夜になりてはげしう吹き出づる風のけしき、まだ冬めきていと寒げに、大殿油も消えつつ、

(早蕨・六―三四〇)

総角巻は、大君の死後、薫が大君のために経をとこなながら、悔いを残したままでいるところへ、匂宮が中君を弔問するためにやつて来る場面である。早蕨巻では、薫と匂宮が語り合つている。薫は大君のことを偲び、匂宮は中君への薫の世話ぶりをいぶかり、二人の間には何かあるだろう、と勘ぐつている。総角巻の場面は宇治であり、早蕨巻の場面は都となつてゐる。この二例の「寒げなり」の状況は、正篇の「冷やかかなり」と共通している。薫の場合、大君の死後、もう逢えないという点で、源氏の夕顔巻の例と一致する。中君に拒

否され、薫との仲を疑わずにいられず、中君のことを想いながら、
想いが届かないでいる匂宮の場合も、孤独を抱える正篇の「冷やか
なり」と同じであるといえよう。

さらに、浮舟巻には、薫と浮舟の最後の逢瀬の場面に「寒し」が見
られる。

男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひた
る身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし。山の方は霞隔
てて、寒き州崎に立てる鶴の姿も、所がらはいとをかしう見ゆ
るに
(浮舟・六一—三六)

薫は、浮舟を迎える邸が完成に近づいたことを語る。薫の言葉を聞
きながら、浮舟は匂宮もまた浮舟を迎えるべく準備を整えているこ
とに煩悶する。山は霞み、寒い中、州崎に鶴の立っている光景が二
人の目に映る。薫はそこに風情を感じているが、浮舟は心の乱れで
それどころではない。この場面において、「男は」「女は」と、それぞ
れが全く別々の心境にあることが語られており、二人の心がすれ違
っていることが示されている。薫にしても、浮舟は大君の形代にす
ぎず、浮舟を前にしながら、思い出すのは大君のことなのである。
二人とも心に浮かべているのは、目の前にいる相手のことではない。
このあと、浮舟は匂宮に連れられて隠れ家で過ごし、二人の間の板
挟みにいよいよ思い悩んで入水を決心するというカラストロフを迎
えることになるのである。

おわりに

最後にまともに入る。「涼し」「涼しげなり」は、源氏については恋
愛の契機となる場面、源氏が言い寄る場面に見られる。恋愛の結果、
身を焦がすほどの想いにとらわれながら、相手にその想いが届か
ない、という状況では「冷やかなり」という語が用いられている。紫上
にとつては、それが出家の契機となり、五戒を受けた結果、「涼し」
「涼しげなり」の環境に生きられるようになる。源氏も、賢木巻で藤
壺につれなくされ、出家を志すが、その時点では実行されない。す
でに、紫上という代償を得、彼女のことが「ほだし」になっているか
らである。かくして、源氏は「涼し」と「冷やかなり」を、違う女性と
の恋愛において幾度か繰り返す事になる。柏木・女三宮密通事件の
後も、涼しくなると、懲りたはずの女三宮に未練を訴えている。女
三宮のことでは、紫上が「冷やかなり」を経験している。二人は、そ
れぞれつらい思いをするが、その思いは自分の胸に秘めるしかない
ものであり、物語の中で、お互いに決定的な孤独へと向かつていか
ざるをえなくなるのである。このように、「涼し」「涼しげなり」「冷
やかなり」の語は、恋愛ならびに出家の契機から到達する境地まで
の心奥の機微を象徴し、なおかつ、登場人物によって使い分けられ
ている。

『うつほ物語』に代表されるように、「寒し」「寒げなり」は、伝統
的には男女の恋愛において相手を求める和歌表現に用いられおり、

『源氏物語』ではそれを滑稽化させて楽しんでいるふしがある。他方、この作品における、シリアスな恋愛の場面における寒の感覚としては「肌寒し」「冷やかなり」が選ばれていた。そこには、登場人物の身を切られるような苦しみが伴われているのである。

『源氏物語』における「寒し」「寒げなり」は正篇では未摘花のイメージとして、彼女の窮乏した生活の象徴であるとともに、彼女の赤い鼻と時代遅れの着物を笑う滑稽味を伴って用いられていた。

宇治十帖では、八宮家の凋落した生活ぶりの象徴となり、薫が援助することになる点で正篇に通じていた。また、正篇における「冷やかなり」に相当する例も見られ、これらには薫と匂宮の交錯が目立った。総角巻、早蕨巻では、同じ場面で、薫は亡き大君を回想し、匂宮は中君を慕っている。浮舟巻では、薫は浮舟のことを考えるとともに、やはり、大君を恋しく思いついでいるのであるし、浮舟の心は薫と匂宮を行ったり来たりしながら、どちらかといえば匂宮に惹かれているのである。がしかし、結局浮舟は二人の間で心を引き裂かれるのであって、最終的にどちらも選ばない。このように、正篇における「冷やかなり」が、一人の人物の孤独な心を映し出していたのに対して、宇治十帖における「寒し」「寒げなり」は、二人のそれぞれ的心情が語られる場面で用いられており、より複雑な構造を抱えているといえよう。

〔注〕

(1) 『源氏物語』における「そぞろ寒し」——光源氏の繁栄——

(『古代中世国文学』12(平10・11))など。

(2) 『源氏物語』における「涼し」「涼しげなり」について——恋愛と出家に絡んで——(『古代中世国文学』13(平11・7))に詳しく述べている。

(3) 『うつほ物語』には、「寒し」が十一例ある。そのうち、幼少の仲忠が母を養う件における冬の季節であることを示す二例(俊蔭巻)と、女御の君が内裏へ菜などを贈る際の「いと寒き頃なめるを」一例(蔵開上巻)と、行事の際の二例を除く六例は、男人間の歌のやりとりや、会話の中に見られる。

・秋の夜の寒きまにまにきりぎりす露を恨みぬ暁ぞなき

・一人のみ夜な夜な霜の寒きには忍の草も生ひずやあるらむ

(以上二首、平中納言の歌、あて宮へ。嵯峨の院巻)

・かく寒きに

(源中納言の言葉。この寒いのには妻の元を放れてきた甲斐

もなく、の意。蔵開中巻)

・松風の寒きまにまに年を経て一人臥すらむ君をこそ思へ

・明けぬれば雲の上にもとまらずにおき行く霜の寒きをぞぞ知る

(源涼の歌、妻へ。藤壺の春宮への返歌。国譲下巻)

いずれも、離れている相手を恋しく思う気持ちが入められてい

る。『うつほ物語』には、名詞「夜寒」五例、「寒さ」一例があり、これらもすべて男女間の恋愛感情に関連したものである。

・「夜寒をいかに」夜寒は」

(一人寝の仲忠、妻、女一宮へ消息。仲忠妻、中務の君して、返事。蔵開中巻)

・「春秋の夜寒などには、常に思ひ出でられ給へど」

(実忠の言葉。北の方を思い出していたこと。国譲中巻)

・一人寝る夜寒もいさや苔を薄み霜おく山の嵐をぞ思ふ

(源涼の妻、涼への返歌。国譲下巻)

・秋の頃ほひ、夜寒に、心細きを

(太政大臣の北の方。地の文。国譲下巻)

・禊には嘆きの花も散りぬらむ八重雲払ふ風の寒さに

(あて宮、春宮へ返歌。菊の宴巻)

また、「寒み」三例、「寒げなり」三例は、男女の恋愛に関連するものの他に、行事の際や、仲忠が琴を引く場面に見られる。

・冬山に巢くひし鳥も冬寒み春の里にや宿り取るらむ

(時蔭歌。「冬を否ぶる鳥」。春日詣巻)

・夜を寒み羽も隠さぬ大鳥のふりにし霜の消えずもあるかな

(弾正の宮歌。兵部卿の宮と承香殿の女御とのこと。内侍

のかみ巻)

・「御うなじの寒げなるも、かかれはぞかし。」

(侍従仲忠琴を弾き、袖を脱ぎ掛けた左大将の言葉。俊蔭

巻)

・今朝の雪こそ、いと寒げなれ

(仲忠、女一宮に消息。蔵開中巻)

・「寒げなる居住まいなり」とて

(仲忠の文。蔵開下巻)

(4) 『万葉集』において、「寒し」は、いわゆる叙景歌の中に詠み込まれた場合と、左にあげるように、旅路に於いて故郷や、自分以外の人間の存在、特に異性を意識して、独り寝の寂寥感を詠ったものの中に詠み込まれた場合があったようである。

・みよしのの やまのあらしの さむけくに はたやこよひ

も わがひとりねむ (七四)

・むしがしま なごやがしたに ふせれども いもとしねね

ば はだしさむしも (五二七)

・いへざかり たびにしあれば あきかぜの さむきゆふへ

に かりなきわたる (一一六五)

・わぎもこは ころもにあらなむ あきかぜの さむきこの

ころ したにきましを (二二六四)

・かりこもの ひとへをしきて さぬれども きみとしぬれ

ば さむけくもなし (二五二五)

・いもとありし ときはあれども わかれては ころもでさ

むき ものにぞありける (三六一三)

—— あいはら・さやか、広島大学大学院博士課程後期在学 ——